

27	箕面市立止々呂美小学校 他1校	20～22
----	-----------------	-------

平成22年度研究開発実施報告（要約）

1 研究開発課題

国際社会の中でたくましく生きる子を育てるために、ことばの力と論理的思考力をもとにした「コミュニケーションの力」と、地域での体験をもとに自分を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育むための小中一貫した教育課程の編成及び指導方法の研究開発。

2 研究の概要

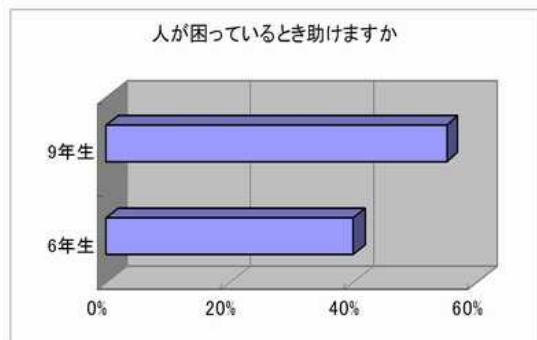
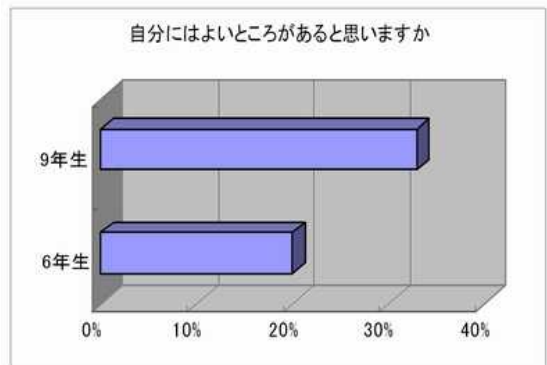
小中一貫校としての9年間で国際社会の中でたくましく生きる子を育てることをねらいとする。そのねらいの実現のためには「コミュニケーションの力」と「自己の確立を図る力」が必要と考え、「話すこと・聞くこと」に関わるコミュニケーションの技能と意欲・態度を育てる「コミュニケーション科」、英語に親しみながら異文化との触れあいを通じてコミュニケーション力の基礎を養う「英語活動科」、地域を題材とした多様な体験をもとに地域を見つめ、自己を見つめる意欲、態度を育てる「とどろみタイム科」を新設した。

また、基盤となることばの力や論理的思考力を確実に習得するために、国語科や算数・数学科をはじめ、各教科、領域でも「コミュニケーションの力」「自己の確立を図る力」を高めることを意識した教育課程の編成をめざした。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究の目的

本校は、現在開発中の新しい住宅地を校区に加え、平成20年4月に施設一体型小中一貫校として新築移転し、新たなスタートを迎えた。また、「特認校制度」により市内から本校への転入学を希望する児童・生徒も受け入れており、移転前の小中合わせて32名の倍になる64名の児童・生徒数でスタートした。さらに、平成21年4月には125名、平成22年12月現在172名と急増している。これまでから在籍していた止々呂美地区の児童・生徒にとっても、新たに転入してきた児童・生徒にとっても、スムーズに学校生活を送るためには互いに自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーションの力が必要となってきた。しかし、右のグラフ（平成20年5月調査）から本校児童・生徒の「自分に対する評価の低さ」と「他者とのつながりの弱さ」を読み取ることができる。新たな環境に対する戸惑いやストレスの影響も考えられるが、今後一層、児童・生徒の自己肯定感を高めながら自己と集団とのつながりを紡いでいくコミュニケーションの力を伸ばしていくことが大きな課題である。



また、コミュニケーションの力は国際化、情報化が進むこれからの社会で多様な価値観や考え方の

人たちとともに子どもたちが「国際社会の中でたくましく生きていく」ためには不可欠の力である。他の国の言語に親しみ異文化を知る活動を発達段階に応じていかに効果的に指導するかについての研究も重要な課題である。

平成20年度は以上のような現状認識から、「コミュニケーション科」「英語活動科」「とどろみタイム科」の3教科を設置するとともに、国語や算数・数学等他の教科との関連を含めて研究をスタートした。平成21年度からはこの3つの教科を中心として、1年生（小学校1年生）ら9年生（中学校3年生）までの9年間を見通したカリキュラムを再編し、発達段階に応じたプログラムや教材の開発、指導方法の研究を進めてきた。

（2）研究仮説

【コミュニケーション科】

コミュニケーション科では、子どもたちが「表現したい」「伝えたい」と思い、また他の人の伝えようとするを「わかりたい」と思って受け止め、その互いの関係性の中で響き合い高め合っていくことを目標にコミュニケーション能力の育成をめざした。また、本研究ではコミュニケーションを「双方向のものであるだけでなく、＜場＞に参加した人が相互作用を通じて意味を作り出す過程である。」という前提で研究を進めてきた。

〔目標を達成するための具体的方策〕

- ①コミュニケーション科の「年間カリキュラム」（年間授業計画＋4つの領域とつけたい力）に基づき、小中9年間のつながりを考えた授業づくりに引き続き取り組み、カリキュラム研究の完成をめざす。その際には、来年度以降の研究開発指定終了後のことも視野に入れ、「総合的な学習の時間」におけるコミュニケーション科的な領域として取り組むべき時間数や内容についても意識して研究を進めていく。
- ②小中一貫校として、異学年の組み合わせによる活動を必要に応じて取り入れる。
- ③子どもたちが活動・学習したことを互いに共有する場面や、振り返りの時間を充実させ、大切にす。
- ④ポートフォリオや授業での子どもの様子の「見とり」を充実させるとともに、評価方法についての研究をさらに進める。
- ⑤他の教科・領域との連携を図る。中でも教科授業の中でコミュニケーション力を培っていくことを学校全体の課題として特に力を入れて取り組んでいきたい。

〔コミュニケーション科のカリキュラム〕

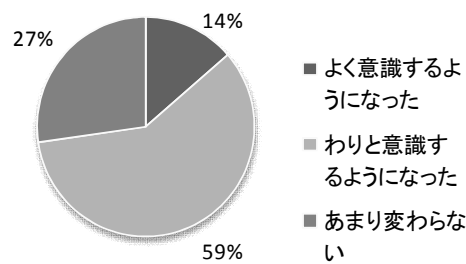
各学年とも年間35時間（1・2年生は34時間）のカリキュラムを編成していくにあたってコミュニケーション科として小中9年間で次の4つの知識や技能、力を育てていきたいと考え、学年ごとのねらいや目標を設定した。なお、この4つの観点を考えるにあたっては大阪教育大学の住田勝准教授からご指導をいただき、見直しなどを行った。また、昨年度（平成21年度）末に行われた文部科学省研究開発学校実地調査において、調査官より「観点」「カリキュラム」などのことばの用い方についてもご指導をいただいた。そこで、平成22年度からコミュニケーション科で今まで使っていた「観点」は「領域」に、「カリキュラム」は「授業計画」へと用語の変更を行った。こうして本校では〈4つの領域とつけたい力〉と〈年間授業計画〉とあわせてコミュニケーション科のカリキュラムとして、その実践と検証に努めた。（4つの領域とは、A. 自尊感情・人間関係づくり B. 情報活用/メディア・リテラシー C. コミュニケーション基礎 D. 総合的表現で、詳細については後掲。）

コミュニケーション科の授業を本格実施した昨年度末には、全学年で1年間の学習の振り返りを行った。7・8年生では「コミュニケーション科の授業があることで、コミュニケーション（話

す・聞く・話し合うなど)について意識するようになりましたか?」という質問に対して、「具体的には発表する力が伸びたと」いう意見が多く見られた。(右のグラフ)

その一方で「聞く」ことについての課題も明らかになってきた。また、昨年度のカリキュラムは「単発的」なものが多かったので、学習活動の反復・継続という面からも課題が残った。

そこで、今年度は学習活動の反復・継続、「聞く」力の育成に重点を置いてカリキュラムを見直した。また、普段の教科授業においてもコミュニケーションを図ることを意識的に行うことがより豊かなコミュニケーション力の伸長につながると考え、「学び合う関係づくり」めざした授業づくりを提案し、研究を進めている。



7割以上の生徒が「意識するようになった」と回答

【英語活動科】

1年生から外国語の音声やリズムに慣れ親しみ、ことばのおもしろさや豊かさに気づかせるとともに、日本と外国の生活習慣の違いを知り、多様なものの見方や考え方があることを気づかせることで、異文化や他者とのコミュニケーションを積極的に図る意欲、態度を育てることができる。また、日本語によるコミュニケーションでは、すでにある人間関係の影響を受け、十分にコミュニケーションを図ることができない場面があるが、英語というツールを使うことで、いつもとは違った表現力やコミュニケーションを発揮することができ、コミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができると考えている。

1～4年生については各学年、各単元で絵本の読み聞かせを中心に3～4時間のUnitを構成し、各単元の最後のところでTaskを入れ、子どもたちが自分たちで作上げたものを使ってコミュニケーション活動をし、5・6年生については英語ノートに加えてWarm up、Cool downに絵本の読み聞かせを含めた別教材を取り入れ、7～9年生は英語科の進度にも合わせてコミュニケーション活動に重点を置いたカリキュラムで授業を展開し、さらに絵本教材も取り入れて、異文化や他者とのコミュニケーションを積極的に図る意欲、態度を育てることができるという前提で研究を進めている。また、絵本教材の選択については、子どもの実態をつかみながら、それぞれの学年にあった教材選びに心がけている。

また、9年間の英語活動を通じて、「自ら進んでコミュニケーションを図ろうとする態度」「広い視野をもち、異文化を理解し尊重する態度、異文化と共生できる資質・能力」「聞くこと・話すことを中心として、主体的に発信するコミュニケーション能力」を子どもたちにつけさせたいと考えている。

さらに、小中一貫校の特性を活かし、下級生への絵本の読み聞かせや複数学年による合同スピーチ大会など、異年齢集団による英語活動を進めることで自尊感情を高めていくことができると考えている。

【とどろみタイム科】

本校の研究主題である、自己を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育てていくためには、地域の人々との交流や体験学習を通して地域の良さを知り、伝統産業を体験理解する地域理解学習を柱とした学習が効果的だと考えている。

また、地域理解学習で自己の良さ(自己肯定感)を発揮し、責任をもって役割を果たすことを通して、「社会に参加することの喜び」「社会で生きている充実感」「社会貢献への喜び」など、人としての「生き方」を学び、考えさせ、感じとらせ、よりよいまちづくりを進めていこうとする「地域社会の一員としての自覚を高める」態度を育てることができると考え、とどろみタイム科の目標を次のように設定した。

目標（ねらい）

とどろみの歴史、文化、伝統、産業、まちづくり（政策）などを調べたり、地域社会に参加したりすることにより、探究の力を育成するとともに、地域についての理解をはかり、地域社会の一員としての自覚を高め、自分の生き方を考え、よりよい地域をつくっていかうとする態度を育てる。

とどろみタイム科を地域での人とのつながりをとおして「生き方を学ぶ」学習と位置づけ、コミュニケーション能力とキャリア教育の領域により、次のような力を子どもたちにつけることができると考え、小中一貫校としての9年間を通じた指導方法、教育課程を研究することとした。

- ◆コミュニケーション能力に関わること
 - ・ 必要な情報を収集し、分析する力
 - ・ 友達と協力して課題を解決する力
 - ・ 自分の考えをわかりやすく表現する力
- ◆キャリア教育に関すること（自分自身、他者、社会に関すること）
 - ・ 自分を見つめ、将来を見通す力
 - ・ 地域を見つめ、社会の仕組みを理解する力
 - ・ 自分の夢や進路の実現に向け社会活動に参加する力
 - ・ よりよい地域をつくっていかうとする力

（3）教育課程の特例

「コミュニケーション科」

1年生（小学校1年生）	34時間程度
2～6年生（小学校2年生～6年生）	35時間程度
7～9年生（中学校1年生～3年生）	35時間程度

「英語活動科」

1～4年生（小学校1年生～4年生）	20時間程度
5～6年生（小学校5年生～6年生）	35時間程度
7～9年生（中学校1年生～3年生）	20時間程度

「とどろみタイム科」

3～6年生（小学校3年生～6年生）	35時間程度
7～9年生（中学校1年生～3年生）	35時間程度

- ・ 1年生 …… 新たな教科の時間として34時間を創設し、加えて国語から時間をあてる。
- ・ 2年生 …… 新たな教科の時間として35時間を創設し、加えて国語から時間をあてる。
- ・ 3～6年生 …… 新たな教科の時間として35時間を創設し、加えて総合的な学習から時間をあてる。
- ・ 7～9年生 …… 新たな教科の時間として35時間を創設し、加えて総合的な学習、選択から時間をあてる。

4 研究内容

（1）教育課程の内容

【コミュニケーション科】

①小中の9年間で育てていきたい4つの知識や技能、力の設定及び年間授業計画の確定

本校のコミュニケーション科で育てていきたい知識や技能、力を以下の4つの領域として設定し、年間カリキュラムを確定していった。

A 自尊感情・人間関係づくり

一人ひとりの子どもの自尊感情を高め、安心して自分を表現することのできる居場所づくり・人間関係づくり・集団づくりを大切にしていきたい。そのために必要なソーシャル・スキル・トレーニングやアサーション・トレーニングなどのプログラムを、学年に応じてカリキュラムに取り入れていく。

B 情報活用/メディアリテラシー

図書館の資料やインターネットを駆使して必要な情報を収集し、適切に活用する力、情報をより有効に発信する力の育成をめざすとともに、メディアリテラシーに対する認識を深める。

C コミュニケーション基礎

(「話す・聞く・話し合う」の各項目については、国語科の新学習指導要領と関連づけて作成)

「話す・聞く・話し合う」ことの学習を土台に、自分の考えや意見などを相手意識をもって論理的に伝えることのできる力を養い、スキルを身につける。具体的な取り組みとして、話し合い・対話・スピーチ・討論・ディベート・プレゼンテーションなどのさまざまな活動を学年に応じて取り入れていく。

D 総合的表現

(A・B・Cの各領域で培われた自尊感情や人間関係、身につけた力やスキルを総合するものとして設定)

さまざまな創作活動(お話・劇の台本づくりなど)や、ことば・音声・身体による表現活動に取り組み、イメージや感性を豊かに表現することのできる力を育むとともに、表現することの楽しさを体験・実感できることをめざす。また、他の人の表現したものを楽しみ、味わう姿勢を養う。

②評価の研究

評価の資料として「ふりかえりシート」「自己評価カード」「評価規準表」を活用し、児童・生徒一人ひとりの具体的な学習状況(力を伸ばすことができた点やできるようになったこと、身につけたスキル)、特に頑張りや成長が顕著であったと思われる学習活動について文章表記による評価を行うこととした。

③年間カリキュラムに基づいた授業の実施

年間カリキュラムに基づいた授業を実施し、その検証を行った。その際には具体的方策に従って、スキル学習に小中のつながりを考えて反復的・継続的に取り組むこと、小中一貫校の利点を生かして小中合同や異学年の組み合わせによる授業の組み立てを考えること、他の領域(生徒指導/道徳・人権教育など)や教科と関連のある授業内容も考えていくことなどに重点を置いた。

④児童・生徒の変容の把握

コミュニケーション科の授業の実施による児童・生徒の変容の把握に努め、授業内容を見直したり、今後の方向性を考えたりする際の依拠するところとしている。

その資料として「ふりかえりシート」を活用するとともに、「自己評価カード」に学習活動の振り返りができる項目を設けた。

⑤重点課題の設定

昨年度の授業の振り返りから「聞く」ことについての課題が明らかとなったので、コミュニケーション科の重点課題としてとりくみを始めている。とどろみの森学園としての「聞く」ことに関するめあてを発達段階に応じて設定し、研究開発指定後も学校全体で指導していけるようなカリキュラムの編成にむけて研究を進めている。

【英語活動科】

英語活動科で言語や異文化との触れあいを通じて実践的コミュニケーション力の基礎を養うなかで子どもたちにつけたい力を以下のように設定した。

目標(ねらい)

- 外国語を通して、言語や文化に対する理解を深める。
- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- 聞くこと・話すことなどの、実践的コミュニケーション力の基礎を養う。

つけたい力

- 自分から進んでコミュニケーションを図ろうとする態度
- 広い視野をもち異文化を理解し尊重する態度、異文化と共生できる資質・能力
- 聞くこと・話すことを中心として、主体的に発信するコミュニケーション能力

英語活動科では1～4年生で絵本を活用した授業を行っている。「なぜ絵本なのか」ということについては以下のように考えている。

- 英語活動によって子どもたちは自分が言いたいことを表現し、それに耳を傾けてもらって自分の気持ちを受け入れられた体験をしている。それがコミュニケーション力の育成につながっていく。
- 絵本を使うと違う文化が入りやすく、いろいろな学習をした後、異文化理解など、それぞれの文化で大切にしているものが伝わってくる。
- 現地の本だから異文化理解につながり、自然な形で子どもたちに入ってきて、子どもたちが文化の違いに気がついてくる。
- 小学生では、自分が感じたことや、自分が今持っているものからしか入ることができないので、絵本があるとコミュニケーションがしやすい。
- 絵本を使って繰り返し聞いても、子どもはいやがらないので英語が耳に残り、子どもは慣れ親しんでいく。
- 子どもは絵本の中の意外なことに気がつき、注目している。その世界に自分自身が入っていき、自分を主人公にして見ている。それで、子どもの口から言葉がでて来ることがある。それが、英語で何かを言おうと言うことにつながってくる。

そして、研究3年目に当たる本年、1～4年生で使用している計20冊の絵本教材について改めて内容を検討した。この結果、教材として適切であると考えられる絵本にはある共通点があることが判明した。それが以下の4点である。

- 繰り返しが多い。
- リズム感がある。
- 絵からストーリーが理解しやすい。
- 扱われているテーマが多い。（色、動物など）

これらの条件に加え、絵本の内容や語彙、表現が児童の発達段階に合っているものが英語活動の教材として適しているのではないかと考え、再度カリキュラムを組み直した。

評価については関西大学の池田真生子准教授からアドバイスをいただき、次のように行ってきた。

- ポートフォリオを評価に活かす。
- 定期的なふりかえりシートで自己評価をし、指導者もそれにより次の指導に役立てる。
- 授業をビデオに撮り、ポイントになる部分を編集し、英語部会で振り返りを行い、今後の授業に活かしている。

さらに、2年目からは、授業案の中に評価の観点を具体的に書き、授業での観察の場面やどの動きを見ていくかを明確にしていた。また、授業後の指導者同士の振り返りによる気づきも大切なポイントとして確認していった。

そして、本年度は評価の数値化の可能性を探り、5～9年生については段階別評価とした。さら

に、子どもの変容をつかむことを目的に、定期的にアンケートをとり、子どもの実態把握に努めている。

【とどろみタイム科】

初年度の文部科学省での研究協議で受けた指摘や指導をもとに、総合的な学習の時間との違いを整理するため、授業計画や授業手法等の再検討を行った。そして、新教科「とどろみタイム科」の授業計画を編成していく基本的な考え方を以下のように設定した。

地域分権時代の到来から、今、学校に求められるものは様々あるが、中でも主体的に地方を担っていける市民の育成のための基盤づくりが重要であると考えられる。また、「箕面市まちづくり理念条例」においても、市と市民の協同によるまちづくりとその主体者の形成及びその基盤づくりの重要性がうたわれている。これらの背景の中で、本校での研究主題である、自己を見つめ、生き方を考える「自己の確立を図る力」を育てていくために、地域の人々との交流・体験学習を通して、地域のよさを知り、伝統産業を体験理解する地域理解学習を「とどろみタイム科」の柱とした。その学習の中で自己の良さ（自己肯定感）を発揮し、責任をもって役割を果たすことを通して「社会に参加することの喜び」「社会で生きている充実感」「社会貢献への喜び」など、人としての「生き方」を学び、考えさせ、感じとらせ、よりよい地域を創っていかうとする「地域社会の一員として自覚を高める」態度を育てることが大切であると考ええる。

その結果、昨年度は「とどろみタイム科」で実施していた内容を再検討し、「よりよい地域を創っていく態度を育てる」と「生き方を学ぶ」学習とを新たに位置づけ、小中一貫校として、学習指導要領に準ずる指導方法や授業計画の研究・開発を進めた。

研究最終年である本年度は各学年の年間評価基準計画を作成し研究を深めた。さらに、PDCAのサイクルで児童・生徒の本教科での学習効果を計るため、アンケートを前期（3・4年生）、中期（5～7年生）、後期（8・9年生）別に実施し、学習計画や指導方法の見直しに取り入れている。

（2）研究の経過

第1年次	<ul style="list-style-type: none">① 3年間を見通した研究計画及び研究組織の編成。② 研究の方向、研究内容、研究方法の明確化と共通理解。③ 新教科の9年間一貫したカリキュラム案の作成。④ 「カウンセリング・コミュニケーション」「ファシリテーション」の研修。⑤ 児童・生徒、教員の振り返りによるコミュニケーション力定着の把握と分析。⑥ 研究協議会、運営指導委員会による評価・指導をもとにした、第1年次のまとめと第2年次の計画作成。
第2年次	<ul style="list-style-type: none">① 第1年次の評価及び課題についての検証。② 研究内容、研究方法、研究組織の修正。③ 新教科の教材開発と研究授業を通しての教材の検証と評価についての研究。④ 「授業づくり」についての研修。⑤ 児童・生徒、教員の振り返り、アンケート等によるコミュニケーション力定着の把握と分析。⑥ 公開研究発表会（中間報告）の実施。⑦ 実地調査、運営指導委員会による評価・指導をもとにした、第2年次のまとめと第3年次の計画作成。

第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ① 第2年次の評価及び課題についての検証。 ② 研究内容、研究方法の検証と修正。 ③ 新教科教材開発と研究授業を通しての教材の検証と評価についての研究。 ④ 児童・生徒、教員に対するアンケート調査などによるコミュニケーション力定着の把握と分析。 ⑤ 第3年次のまとめ。（成果と課題） ⑥ 公開研究発表会（研究結果報告）の実施。 ⑦ 研究成果を各教科へ還元する方策の提示。
------	---

（3）評価に関する取組

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全国学力・学習状況調査をコミュニケーションの視点から分析。 ○ 「児童生徒のストレス状態に関する調査」を全児童・生徒について実施。調査結果分析。 ○ ポートフォリオと振り返りシートによる評価の研究。 ○ 研究協議会で英語活動の評価を数値化する研究を求められる。 ○ 学校協議会において研究開発の取組についての意見を求める。 ○ 運営指導委員会の実施。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全国学力・学習状況調査をコミュニケーションの視点から分析。 ○ コミュニケーション科では文章表記での評価を行う。その資料としてのポートフォリオ、振り返りシート、自己評価カードの内容の研究と評価基準法の作成を行う。 ○ 英語活動科ではポートフォリオを活用した評価、振り返りシートによる自己評価の研究と、評価シートによる単元ごとの3段階評価について研究。 ○ とどろみタイム科ではポートフォリオ、振り返りカードの活用について研究。評価の観点や評価基準の明確化が課題。 ○ 学校協議会において研究開発の取組についての意見を求める。 ○ 運営指導委員会の実施。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全国学力・学習状況調査をコミュニケーションの視点から分析。 ○ コミュニケーション科では評価の資料として「ふりかえりシート」「自己評価カード」「評価規準表」を活用し文章表記による評価を行う。 ○ 英語活動科ではポートフォリオを活用した評価、振り返りシートによる自己評価を行い、評価の数値化の可能性を探り、5～9年生は段階別評価とした。また、児童・生徒の変容をつかむためにアンケートを年3回行う。 ○ とどろみタイム科ではポートフォリオ、振り返りカードを活用と併せて、学年ごとの評価の観点と評価基準表を作成。児童・生徒の変容をつかむためにアンケートも実施。 ○ 学校協議会において研究開発の取組についての意見を求める。 ○ 運営指導委員会の実施。

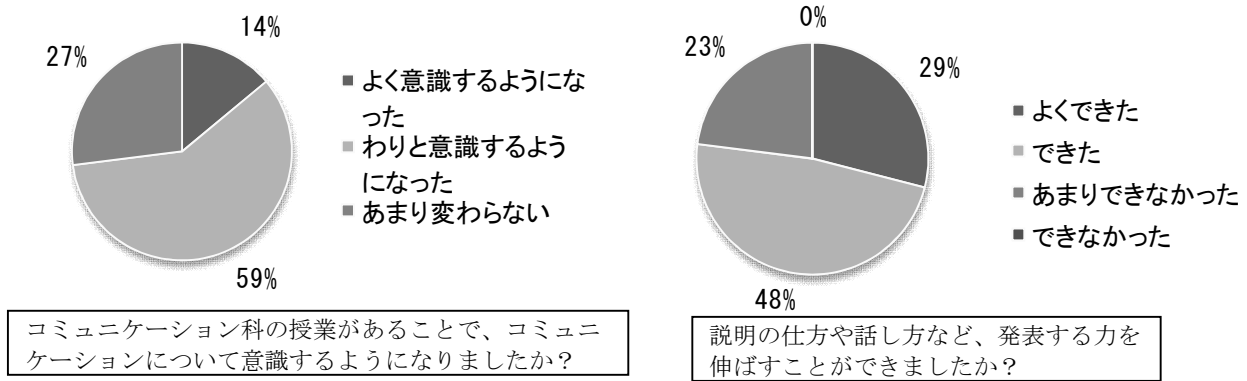
5 研究開発の成果

（1）実施による効果

①児童生徒への効果

コミュニケーション科の授業を続けたことでコミュニケーション（話すこと・聞くこと・話し合うことなど）について意識する児童・生徒が増え、説明の仕方や話し方など発表する力を伸ばすことができた実感する児童・生徒も増えた。コミュニケーション科の授業で相手を意識してわかりやすく伝えるためのスキルを習得するとともに、1年間を通じてコミュニケーション科を始め、と

どろ



みタイム科や英語活動科、さらに各教科や学校行事で発表したり、話したりする機会を多く持つことができたので人前で話をするものの抵抗感が薄れ、コミュニケーションの力が伸びたと実感することができている。

また、小中一貫校の特徴を活かして異学年集団での授業を取り組んできたが、下の学年の子どもたちは上の学年の子どもたちから褒められて笑顔になり、上の学年の子どもたちは下の学年の子どもたちからあこがれのまなざしを受けて誇らしげに笑顔を見せていた。コミュニケーション科の授業では確実に子どもたちに自尊感情の高まりが見られ、互いの関係性の中で高め合っていこうとする姿が見えてきた。

英語活動科では小学生は絵本を活用した授業を行っている。子どもたちは興味を持って絵のイメージをふくらませ、楽しく英語に親しんでいる姿が見られる。英語を使ったゲームや歌にも大きな声を出しながら授業を楽しんでいる。絵本を活用することで、話の流れで捉える力がつき、一字一句にとらわれる場面が少なくなってきた。また、英語で話すことに抵抗感が少なくなり、京都での校外学習で「外国の人とコミュニケーションをしてみよう」というテーマを掲げたところ、観光地を訪れている外国の人たちに躊躇なく積極的に話しかける姿を見ることができた。

中学生も英語活動の時間を楽しみにしており、英語で話すことへの抵抗感が少なくなってきた。ニュージーランドの中学生たちと交流する機会があったが、物おじすることなく、大きな声で英語で話しかけて積極的にコミュニケーションを取ろうとしていた。また、言葉や文化に対して興味の幅が広がり、疑問に思うことについて質問ができるようになってきた。ALT との対話やグループでの話し合い、英語での発表を続けていくことで、相手の顔や目を見てコミュニケーションがはかれるようになった。

とどろみタイム科では地域の人々や社会との関わりの中で、自分のよさを発揮する機会が増えた。小中学生が共通した題材に取り組むことにより、先の学習を見通したり、自分の成長モデルとして上級生を手本とすることができたり、発達段階に応じた責任をそれぞれが果たす機会が増えた。その結果、達成感が実感でき、いきいきと学習や活動を行う児童・生徒の様子が見られるようになった。

小学生では地域のことを知ることを楽しいと感じ、地域への興味が高まっている。中学生では「まちづくり」への関心が高まり、地域のことを情報発信することの意義を認識するようになってきた。

いろいろな形で地域の人々と交流する場面が増え、子どもたちの中に地域を大切にしたいという気持ちが生まれてきている。地域のお年寄りから「道ですれ違ったときに『こんにちは』としっかりとあいさつしてくれてうれしかった。」という声も聞かせていただいた。

②教師への効果

研究組織として4研究部会（コミュニケーション部会・英語活動部会・とどろみタイム部会・授業改革部会）を設置し、図書館司書や事務職員も含む教職員がそれぞれの部会に所属して研究に取

り組んでいる。加えて4部会の代表者と管理職、校務分掌各部代表者からなる研究推進会議を設置し、各部会の調整と全体の進捗状況の確認等を行っている。

小中学校の教職員と一緒に「子どもや学校の現状と課題、そして方向性」を共有するための議論を積み上げることにより、確実に学校総体のベクトルを一つにすることができ、日々の教職員の実践に生かされてきている。「1つの教材を作るのに小学校の先生と中学校の先生と一緒にあって、ああでもない、こうでもないやっているとやることがすごく楽しいことだと感じるようになった。」ということばに教職員の意識の高まりがうかがえる。

また、新教科だけでなく、各教科の授業の中でもコミュニケーションを意識した授業づくりを考えるようになってきた。子どもと子ども、子どもと教材、子どもと教師をつなぐ授業の実践方法について研究を進めていこうという意識が高まっている。

英語活動科では指導案がきちんと整理されたので、どの担任でも見通しを持って授業が進められるようになった。また、補助教材（ICT関連、ピクチャーカード、グッズなど）の蓄積が進み、今後の授業に生かしていくことができる。

とどろみタイム科の授業を進めるにあたり、多くの地域の方や行政、事業所の方とのつながりが生まれ、教師自身の視野を広げることにつながった。

③保護者等への効果

保護者には学校だよりや学年通信、ホームページ等を通じて研究開発学校として取り組む方向性や具体的な内容を周知するとともに、ゲストティーチャーや学校支援のサポーターとして様々な活動に参画いただき、表現活動の発表会などにも参加していただいている。その際、子どもとの対話、マナー等コミュニケーションを意識した対応をお願いし、ご協力をいただいている。その結果、「見守り活動」の場面や日常の場面において、子どもたちにあいさつや声かけを積極的にしていたできるようになり、子どもたちのコミュニケーション力を高める力となっている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- 小中一貫した9年間の教育課程を編成するうえで、発達段階に応じた課題や教材の配置になっているかの検証が必要。9年間の継続的な授業内容となるよう検証を進める。
- コミュニケーション科では「聞く」ということについて発達段階に応じた達成規準を設定し、「聞く」ことに関する学年に応じた学習を取り入れていく。
- 評価基準をもとに評価を進めているが、評価基準の妥当性についてさらなる検討が必要。
- 「コミュニケーション基礎」に関わる「話す」「聞く」「話し合う」「発表する」ことに関しては、学校全体で共有できる「マナー」や「ルール」、「スキル」を明らかにし、全教職員が同じ姿勢で子どもたちに指導していく必要があり、共有できるものを提案していく。
- コミュニケーション科の授業だけでなく、他の授業の中でも日常的にコミュニケーション力の育成に力を入れていこうという確認のもと、意図的、積極的に「話し合い」や「意見交流」などの活動を授業の中に取り入れる場面を増やし、学校全体の意識として徹底していく。
- 英語活動科の中でさらに異学年の交流の場を増やし、達成感や自尊感情を高める方策とする。
- 英語活動科ではHRT（学級担任）主体で授業を進めていける状況ができつつあるが、さらに教師のスキルアップをはかり、担任一人での授業も視野に入れた授業計画も考えていく。
- ポートフォリオの活用をさらに進め、保護者への説明にも活用する。また、評価はよりシンプルな形を追求し、評価のための評価にならないように留意していく。
- いずれの教科でも、事後指導に十分時間をとり、自己評価や友達同士の交流、教師からの評価を丁寧に行うことでさらに達成感や新たな自分発見につなげるよう努める。
- 児童・生徒数が少ない中でのアンケート調査には限界があるので、児童・生徒の声を直接聞き取るなどして検証し、学習効果を高めていく。
- 保護者や地域への情報発信を積極的に行ってきたが、今後さらに人口が増加する中で効率的な情報の発信を考えていく必要がある。

箕面市立止々呂美小学校及び止々呂美中学校 教育課程表（平成22年度）

止々呂美小学校	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	コミュニケーション科	英語活動科	とどろみタイム科	総授業時数	標準授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育								
1学年	252 (-20)		136		102	68	68		102	34	34		34 (+34)	20 (+20)		850 (+34)	816
2学年	260 (-20)		175		105	70	70		105	35	35		35 (+35)	20 (+20)		910 (+35)	875
3学年	235	70	175	90		60	60		90	35	35	40 (-55)	35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	980 (+35)	945
4学年	235	85	175	105		60	60		90	35	35	45 (-55)	35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	1015 (+35)	980
5学年	180	90	175	105		50	50	60	90	35	35	40 (-35)	35 (+35)	35	35 (+35)	1015 (+35)	980
6学年	175	100	175	105		50	50	55	90	35	35	40 (-35)	35 (+35)	35	35 (+35)	1015 (+35)	980
計	1337 (-40)	345	1011	405	207	358	358	115	567	209	209	165 (-180)	209 (+209)	150 (+80)	140 (+140)	5785 (+209)	5576

止々呂美中学校	各教科の授業時数									道徳	特別活動	選択教科	総合的な学習の時間	コミュニケーション科	英語活動科	とどろみタイム科	総授業時数	標準授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	英語									
1学年	140	105	140	105	45	45	90	70	105	35	35	0	10 (-55)	35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	1015 (+35)	980
2学年	105	105	105	140	35	35	90	70	105	35	35	39	26 (-55)	35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	1015 (+35)	980
3学年	105	85	140	105	35	35	90	35	105	35	35	94	26 (-55)	35 (+35)	20 (+20)	35 (+35)	1015 (+35)	980
計	350	295	385	350	115	115	270	175	315	105	105	133	62 (-165)	105 (+105)	60 (+60)	105 (+105)	3045 (+105)	2940